

知床連山ニツ池における登山道荒廃の現況調査結果

1. ニツ池における現状の問題点とその取り組み経緯

知床連山のオッカバケ岳と知円別の上に位置するニツ池周辺では、池を中心にして湿原植生が広がっており、登山道がこの植生帯の中央を横断するように通っていること、また野営指定地があることなどから、登山者の踏圧等によるハイマツ林縁部の雪田植生の後退および登山道部分の荒廃（侵食および複線化）が指摘されている。平成 16 年から 19 年にかけての専修大学/石川教授らによる調査では、ニツ池の 2 つのモニタリングサイトにおいて、3 年間で湿原植生群落の侵食が著しく進んでいる現状と、その群落は岩塊の間にミズゴケなどが成育し、さらに風衝植物が侵入した特殊な湿原であると共に希少種であるラウスゲやタカネクロスゲの生育も確認されていること、そして何らかの対策を講じないと、これらの荒廃状況が悪化の一途をたどることが指摘されている。

これらの問題は、知床半島利用適正化会議でも報告されており、平成 20 年度の利用適正化実施計画においては「当該ルート周辺のハイマツ低木林内へのルートへの付け替え、ニツ池の野営地の代替地の検討について、関係機関で協議を行い、実施に向けた作業スケジュールを策定する」としている。

2. ニツ池の現況調査結果

平成 20 年 9 月 8 日～9 日に環境省が受注コンサルタントとともに実施した現地調査で、以下の認識を得た（次頁の現況写真参照）。

< 現地調査時での現況認識 >

湿原植生を横断する登山道（調査地点の SR4～SR5 周辺）において荒廃が認められ、特に SR4 では、平成 19 年度の調査時よりもさらに荒廃が進行している印象を受けた。

天の池と地の池を結ぶように存在する登山道は、天の池の水を地の池に流失させる可能性があるとの指摘は現地を見て理解はできたが、予想される影響の程度やその適切な把握手法については確認できてきない。また、天の池東側に広がる湿原植生に与える影響について、水の流動の関係から影響評価を行う必要があるのではないかと考えられた。

野営指定地周辺にはロープ設置の植生保護対策もされているが、フードロッカーの奥にトイレ道があり、また、ハイマツの林縁部等に尿尿の存在が認められた。

迂回ルート設置の可能性を指摘されているハイマツ低木林内を踏査したが、枝の直径が10cmを超える物が多く、また、ここにもミズゴケなどの下層植生が認められ、迂回ルート設定の適否の判断についても慎重な検討が必要と思われた。

希少種として指摘されているラウススゲやタカネクロスゲの存在については同定可能な者がいなかったため確認できなかった。

ルートや野営場所の付け替えについては、現在の利用体験の側からも、利用者の行動特性等も踏まえて実効性のある対策を検討していく必要があると認識された。

二ツ池現況写真（2008/9/8 現地調査）

